

芸術ぎらい

太宰治

魯迅の隨筆に、「以前、私は情熱を傾けて支那しなの社会を攻撃した文章を書いた事がありましたけれども、それも、実は、やっぱりつまらないものでした。支那の社会は、私がそんなに躍起やつきとなつて攻撃している事を、ちつとも知りやしなかつたのです。ばかばかしい。」
というような文章があつて、私はそれを読んでひとり
で声を出して笑つてしまつた事があるけれども、私が
映画に就ついて語る場合も、少しそれと似たような結果
になるのではあるまいかと思われる。

私は十年来、ひどくまずい小説ばかり書いて来ている三十六歳の男子であつて、小説界に於いても私の言

説にまじめに耳を傾けてくれるような物好きな人がひとりもない現状なのだから、いわんや、映画界に於いては、誰も私のつまらぬ名前など知らんのではないかと思われる。名前を知られたって、ろくな事は無いのだし、別段、自分の無名を残念がってもいないのであるが、でも、世間の人は、無名の人の文章は（お互いいいそがしいのだから）てんで読もうとしないので、困るのである。私がもし映画統制局々長（そんな官名があるかどうか知らないが）とか何とかの肩書のある男であったなら、「どうも、なんですねえ、娯楽味を忘れては、なりませんですねえ」などと何の意味も無い

ような意見を述べても、映画界の幹部たちはひとしく感奮し、ただちに映画界の全従業員を集めて、「実にこの娯楽味を忘れてはなりません」という一場の訓辞をこころみるかも知れないのだから、人の気持って微妙なものだ。

私だって少しは誇りを持っている。自分の書いた文章が、全く読まれないか、あるいはざっと一読の光栄に浴して、そうして、「なんだいこれは」と顔をしかめられるのをハッキリ自覚しながら、それでも一字一字まじめに考え考えして文章を書かなければならぬというのは、つらい話である。むかしの私だったら、この

種 of 原稿 of 依頼 に対しては汗顔平伏して御辞退申し上げるに違いないのであるが、このごろの私は少し変わった。日本のために、自分の力の全部を出し切らなければならぬ。小説界と映画界とは、そんなに遠く隔絶せられた世界でもない。小説家としての私の愚見も、あるいは、ひよつとしたら、ひとりの勇敢な映画人に依つて支持せられるというような奇蹟きせきが無いものでもあるまい。もし、そのような奇蹟が起つたならば、これもまた御奉公の一つだと思われる。どんな小さい機会でも、粗末にしてはならぬのである。

映画は芸術であつてはならぬ。芸術的雰囲気などといういい加減なものに目を細めているから、ろくな映画が出来ない。かつて私は次のような文章を発表した事がある。「誰しもはじめは、お手本に拠つて習練を積むのですが、一個の作家たるものが、いつまでもお手本の匂いから脱する事が出来ぬというのは、まことに腑^ふ甲^が斐^いない話であります。はつきり言うと、君は未だに誰かの調子を真似しています。そこに目標を置いているようです。〈芸術的〉という、あやふやな装飾の観念を捨てたらよい。生きる事は、芸術でありませぬ。自然も、芸術ではありません。さらに極言すれば、

小説も芸術ではありません。小説を芸術として考えようとしたところに、小説の墮落が胚胎はいたいしていたという説を耳にした事がありますが、自分もそれを支持して居ります。創作に於いて最も当然に努めなければならぬ事は、正確を期する事であります。その他には、何もありません。風車が悪魔に見えた時には、ためらわず悪魔の描写をなすべきであります。また風車が、やはり風車以外のものには見えなかつた時は、そのまま風車の描写をするがよい。風車が、実は、風車そのものに見えているのだけでも、それを悪魔のように描写しなければ芸術的でないかと思つて、さまざま

見え透いた工夫をして、ロマンチックを気取っている馬鹿な作家もありますが、あんなのは、一生かかったつて何一つ擱めない。小説に於いては、決して芸術的雰囲気^{ふんいき}をねらつては、いけません。あれは、お手本のあねさまの絵の上に、薄い紙を載せ、震えながら鉛筆で透き写しをしているような、全く滑稽^{こっけい}な幼い遊戯であります。一つとして見るべきものではありません。雰囲気^{ふんいき}の醸成を企図する事は、やはり自瀆^{じとく}であります。へチエホフ的に、などと少しでも意識したならば、かならず無慙^{むざん}に失敗します。無闇^{むやみ}に字面^{じづら}を飾り、ことさらに漢字を避けたり、不要の風景の描写をしたり、みだり

に花の名を記したりする事は厳に慎しみ、ただ実直に、印象の正確を期する事一つに努力してみて下さい。君には未だ、君自身の印象というものが無いようにさえ見える。それでは、いつまで経っても何一つ正確に描写する事が出来ない筈です。主観的たれ！ 強い一つの主観を持つてすすめ。単純な眼を持つて。」

　　去年の暮、私は二つの映画を見た。「無法松の一生」とかいうのと、「重慶から来た男」とかいう映画である。そうして、「無法松」はたいへんつまらなかった。「芸術的」という努力は、なんてまあ古いもんだらうと思っ

た。阪妻はヤニングスみたいな熱演で、私は阪妻に同情したが、しかし、いいとは思えなかった。阪妻に対する不満ではない。「無法松」という映画に対する不満である。どこがいいのか、私には、さっぱりわからなかった。傑作意識を捨てなければならぬ。傑作意識というものは、かならず昔のお手本の幻影に迷わされているものである。だからいつまで経っても、古いのである。まるで、それこそ、筋書どおりじゃないか。あまりに、ものほしげで、閉口した。「芸術的」陶酔とうすいをやめなければならぬ。始めから終りまで「優秀場面」の連続で、そうして全体が、ぐんなりしている。「重慶

から来た男」のほうは、これとは、まるで反対であった。およそ「芸術的」でない。優秀場面なんて一つもない。ひどく皆うろたえて走り廻っている。けれども私には、これが非常に面白かった。決して「傑作」ではない。傑作だの何だのそんな事、まるで忘れて走り廻っている。日本の映画は、進歩したと私はそれを見て思った。こんな映画だったら、半日をつぶしても見に行きたいと思った。昔の傑作をお手本にして作った映画ではないのである。表現したい現実をムキになって追いかけているのである。そのムキなところが、新鮮なのである。書生劇みたいな粗雑なところもある。

学芸会みたいな稚拙なところもある。けれども、なんだか、ムキである。あの映画には、いままでの日本の映画に無かった清潔な新しさがあつた。いやらしい「芸術的」な装飾をつい失念したから、かえって成功しちゃつたのだ。重ねて言う。映画は、「芸術」であつてはならぬ。私はまじめに言っているのである。

底本…「太宰治全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年6月27日第1刷発行

底本の親本…「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

初出…「映画評論」

1944（昭和19）年4月1日発行

入力…土屋隆

校正：noriko saito

2005年3月17日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで
す。